霊◯新◯の献身
5

霊◯新◯の献身　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19745789

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊

最霊です。ですが師匠総受けです。今回も本番は無しです。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

霊◯新◯の献身　5

何がそんなに面白いのか、

と霊幻新隆に最上は尋ねた事があった。

確定死刑囚の独房の窓を、霊幻はそれは楽しそうに眺めていたからだ。
今日はたくさん雲が流れてきて面白い、と霊幻は言う。見てて飽きない、と。
「それに、モブが空を眺めるのが好きなんだ。あいつも今頃こうしているのかもしれない、と思うと、俺は嬉しくなるんだよ」
そうやって愛おしそうに微笑む霊幻を思い出しながら。

最上は拘束されて、薄暗い箱の中に監禁されている影山茂夫を見ていた。
「おい、少年」
「……」
「聞きたいことがある。……何故君は人を殺したんだ？君はそんな人間じゃ無かったはずだ。何故、人を殺した？」
ゆるゆると茂夫はその頭を上げた。
「……僕が殺した、って貴方は信じてくれるんですか？」
「そうじゃないか、と予想しただけだ。自分が死刑になってもいい。それほどまでに霊幻の心を動かすのは、キミを置いていないだろう。霊幻新隆の精神世界で中心に据えられているのは、キミだ」
「……はは、素直に喜べないなあ」
「なんだね？」
「僕ね、師匠に振られてるんですよ。そんなに大事に思ってくれるのなら、恋してくれたっていいのにね」
「……少年、それは……」
「僕が人を殺したのは、」
どこか狂気じみた笑顔を茂夫は浮かべる。

「犯されそうになっている師匠を助けようとしたからなんです」
夕方。学校帰りに相談所に寄った茂夫は、霊幻が屈強な男に口説かれている現場に鉢合わせた。
茂夫が来たのにも気付かず、男はのらりくらりと愛の告白を躱わす霊幻に業を煮やし、その大きな拳で霊幻の顔を殴り付けた。
茂夫は霊幻の顔から嫌な音がして、自分の目の前が怒りで真っ赤になったのを覚えている。
気を失った霊幻に口付けて、服に手を掛けた男を止めようとして。
「やり過ぎてしまったんです。……いや、何処かで、僕はその男に殺したいくらい怒っていたのかもしれない。超能力の調整が上手くできなくて、男の首を折ってしまった」
「ちょっと待て、それは殺人と言うよりは、過失というか、過剰防衛だろう」
戸惑う最上に、茂夫はせせらわらう。
「誰が証明できるんですか」
「霊幻は昏倒するほど殴られたのだろう？その傷があれば……」
「違いますよ。超能力というものを、誰が証明できると言うんですか」
最上は黙る。
「師匠は僕がそうやって超能力の扱いに失敗してしまうよりもずっと前に、年々強くなっていく僕の超能力による事故を、心配していました。そして政府の人と打ち合わせをしていた」
「政府の人……？」
「そうです。超能力者を監視する人たちです。その人たちについては僕より師匠の方が詳しいですよ。僕はあまりよく知りません。ともかく、超能力による事故が起こってしまったら……師匠が身代わりになる。そんな密約を、いつの間にか交わしていたんです」
茂夫は唇を噛む。
「……日本に暮らしている罪のない超能力者たちが差別の対象にならないように。政府の人はそれを望んだんです」
「しかし、霊幻は……」
「分かるでしょう？最上さん。師匠が何を望んだのか。あの優しくて……自己評価の低い人が、何を望んだのか」

詐欺師もどき１人の幸せより、未来ある若者の人生を。
「……」
霊幻ならそれを望むだろう、と最上は容易に予想できるようになってしまっていた。
「お願いです、最上さん…………」
茂夫の唇が禁断の願いを紡ぐ。
最上の眼窩が黒くなり、彼は悪霊としての姿をあらわした。
「いいだろう。その願い、聞き届けた。だが、対価を貰うぞ」
「なんでも持っていけばいい。僕の超能力全部とかですか？」
「いや」
にたあ、と大悪霊は笑う。
「霊幻新隆を貰う」
「！そ、れは……！！」
「なんでもと言ったのはキミだろう？安心したまえ、悪いようにはしない。私はなかなかに彼を気に入っているのでね」
「………………分かりました。頼みましたよ、最上啓示さん」
きらりと光を取り戻した茂夫の瞳に宿る物も、『愛』で。
眩しいな、と最上はその黒い眼窩を細めた。

※

拘置所に戻って、最上はもう眠っている霊幻の頭に手をかざす。
今日は記憶は雲にカモフラージュされていた。
途切れることのない黄昏の中で、彩雲と化した記憶達が、巨大なオーロラの中をゆったりと流れていく。
（相変わらず、美しいな）
最上は思わずその絶景をしばし眺めてしまう。
が、頭を切り替えて、手を翳して霊幻の記憶を手繰りだした。
（比較的新しい記憶で……『政府』や『役人』のキーワードで引っぱれるもの……）
ぶわ、と最上の目の前に情景が広がる。
山の中。真っ暗な森の中を、車のライトが照らしている。
明暗がはっきりし過ぎて焦点が合わない。最上は目を凝らした。

「厄介なことをしてくれたな」
坊主頭のシルエットが苦々しそうに吐き捨てる。
「超能力者が、例え正当防衛でも、人を殺しちまったら、世論がどうなるか分からない」
その坊主頭はイライラした手付きで煙草に火を付ける。
「……人を殺したのが、超能力者じゃ無ければいいんだな？」
思い詰めた顔をして山吹の花色をした瞳が揺れる。
「……っダメです霊幻さん、それはやめてください！」
男がヘッドライトに照らされて。
サイレンと共に記憶は固まった。
が、遅かった。
「今のは、芹沢、という男だな？」
「……遅かったか」
真っ白な空間で、デスクチェアに座った霊幻が額を押さえてくるくる回っている。
「なあ最上さんよ、アンタこんな終わった事件の真相を暴いてどうするんだよ」
「終わってないだろう。真犯人は裁かれず、無実の君は死刑になろうとしている」
「……アンタは俺が無実だと思ってるのか」
「君の弟子が言っていた。『師匠は無実だ』と。キミはキミの弟子を嘘吐きだと言うのかね？」
「……っ」
さて、と最上は霊幻の記憶から芹沢の情報を引き出そうとする。
「ぅ、あ！？や、やめ、やめてくれ……っ」
「ん？何か感じるのかね？」
「胸ん中直接かき回されてるみたいだ……っ」
「それは君が抵抗するからだろうな。私に身も心も明け渡したまえ。そうすれば楽になるぞ」
「馬鹿、言っ……ん、ぅ……」
ぎゅ、と霊幻は胸を押さえる。
「せ、芹沢に、酷いことしないでくれよ……？」
「……その『願い』、きいてやろう」

はっと霊幻は思わず駆け出した。
「無駄だ。私から精神世界で、無能力のキミが逃げはできないよ」
霊幻の目の前に最上が現れる。
「せっかく対価をいただくのに、その格好では色気が無いな」
最上が指を鳴らすと、霊幻は金魚のような赤い扇情的な浴衣に着替えさせられた。
「やだ、最上さん、やめ……ぁっ！」
両手を押さえられ、首筋に唇を落とされて霊幻はびくりとはねる。
「対価にキミを寄越したまえ。何、ここは私の力が及ぶ精神世界だ。気持ちいいだけで、痛みは無いようにしておく」
最上の唇が胸の上をするすると滑り、はぁっと熱い息が霊幻の唇から漏れた。
「もが、最上さんっ、っあ、あ、」
「何かね？」
「こういうことするなら、さぁっ、……俺に言わなきゃいけないこと、あるんじゃねぇの？」

バチと霊幻は目覚めた。

身体を起こして辺りをきょろきょろと見回すが、最上の姿は無い。

「……意気地なし」

霊幻は唇を尖らせる。

「悪霊になると言えなくなることもあるのだよ」

どこか言い訳じみた声だけが、ぽそりと耳元で響いた。

続